「第1回 手取川水系流域委員会」の審議内容（議事要旨）について

去る、平成16年6月23日（水）金沢市此花町の金沢都ホテルで、『第1回手取川水系流域委員会』が開催されました。

委員会では、各委員毎に手取川流域委員会での審議を進めていく上での抱負や、手取川流域に対する思い等を述べていただきました。主なご意見は次のとおりです。

記

《流域圏の設定について》

- ・ 水文学でいう流域という考えにとらわれることなく、手取川扇状地を含むさらに広い領域を見据えた流域圏という考え方で議論してほしい。
- ・ 環境を考える際には、流域という概念を水文学的に限定せず、川の流れている周りの地域の環境の柱として位置づけながら、考えていくべきである。
- ・ 直轄区間のみでなく、流域全体に目を向けた計画としてほしい。

《生物について》

- ・ 魚は水涸れが起きては移動できないし、横断工作物等の障害物などがあっても移動ができず、魚にとって非常に棲みづらい状況である。しかし、下流部で生息するトヨは地下水の自噴する場所でないとは生息できないが、その地下水の涵養をするために現状では、横断工作物等により農業用水を取水している。非常に難しい問題を抱えている。
- ・ 鉄筋コンクリートの建物を造るようになってから手取川の砂はどんどんとられてしまい、石だらけになった。河原の昆虫はどんどん数が減り、中には絶滅したものもある。
- ・ その場所で一度絶滅した種を移植・復元するのは容易ではない。
- ・ 自然環境、特に生物の評価には長期間のモニタリングが必要。
- ・ 適切な評価を行うためにも、事後調査等をしっかりやらないといけない。気象・水文等の観測も大事だが、同時に生物調査も行ってもらいたい。
- ・ 日本的に鳥類の繁殖地が減少している。また、レッドデータブックのコアジサシ、オオタカ等たくさんの野鳥が利用している。
- ・ 昔は河原に砂場や石原などがあり、それにより植生も非常に多様であったが、近年は単純化（下流化）してきている。
- ・ 日本の河川の植生の特徴をよく考えて議論していく必要がある。
- ・ 川の本来の姿は水が流れているもの、水（維持流量）が流れているようにしてほしい。

- ・ 魚類にとって手取川の濁りも問題であり、なんとかしてほしい。
- ・ 稚魚の生育のためにワンドを作ってほしい、魚つき林も必要。

《環境について》

- ・ 手取川扇状地は石川県最大の地下水の水がめである。手取川扇状地の地下水は降水・手取川の地表水・かんがい用水が涵養源であり、地表水と地下水を一体として議論していく事が重要である。
- ・ 水質は、水の中の生物のエネルギーであり栄養源であり、また、さまざまな影響を与える物質である。川の流れと水質によって様々な生態系が形成されており、水の質とは、河川の環境に非常に影響が大きいものである。
- ・ 人間のみでなく、河川内の生物を考えた上で水質の目標を検討すべき。
- ・ 水質は濃度は薄い地球を循環しており、非常に複雑である。

《歴史・文化について》

- ・ 何故、手取川がここにあるのか、成り立ちを考えながら議論していきたい。
- ・ 後世の人々に川がこういう役割をしていたということを分かり易く伝えるためにも、これからは、整備と同時に歴史的な景観を残せるような配慮をして欲しい。
- ・ 昔の災害（大昔）の経験も活かしながら計画の検討を進めて欲しい。
- ・ 夢のある手取川・ロマンのある手取川。それを子供たちの教育の場として活かせるようにしてほしい。
- ・ 野外学習に最適なフィールドであり、環境教育のプランも検討してほしい。
- ・ 川のロマン性、物語性を高めてほしい。手取川や橋に魅力的な愛称をつけてはどうか。
- ・ 聖なる川を中心とした流域全体をテーマパークとして整備してはどうか、上流・下流域では「水」を浮上させ、中流域では「火」の芸術である九谷焼を取り込み、川北町の火祭りアンサンブルをなす。メリハリを明確に出していくと独創性にも繋がり、整備のテーマとなる。
- ・ 手取川は自然豊かで、ダイナミックな本物志向の河川である。周辺の開発等により環境面・精神面への影響を危惧している。

《地域・経験について》

- ・ これまでの自分の経験を生かし、議論していきたい。
- ・ 今後の整備計画を定める大事な会議と思う、十分な審議をお願いしたい。
- ・ 地元の一員として意見を述べたい。
- ・ 鶴来町山ノ庄（明島）地先堤防は洪水が一番最初にあたる箇所であり、危険である。